時の話題

"いじめ"のコントロールは、現代の「人間の証明」

静岡大学教授
馬居　政幸

一、子どもたちの声は

○あなたの学校に〝いじめ〟はありますか
・わからない　三四%
・ある　三三%
・ない　三三%

○あなたは〝いじめ〟にかかわったことがありますか。
・かかわったことはない　五一%
・いじめられたことがある　二二%
・いじめたことがある　一六%
・いじめを見て見ぬふりをしたことがある　一二%

○今後〝いじめ〟は減ると思いますか。
・増えると思う　三九%
・減ると思う　一九%
・わからない　四二%

○〝いじめ〟の原因はだれにあると思いますか
・両方　四六%
・いじめる側　三〇%
・周りで見ている側　一〇%
・いじめられる側　九%
・その他　五%

これは今年の三月に発売された『少年ジャンプ』第一四号に掲載されたアンケート結果の一部です。集計件数は三、〇〇〇、平均年齢一四・四九歳、『少年ジャンプ』が誌上で読者に呼びかけて得た回答を集計したものです。

『少年ジャンプ』の発行部数は六〇〇万、日本の約八割の子どもが読んでいるといわれます。その意味で、この数値から、私は〝いじめ〟に対する子どもたち自身の思いを読み取りました。それは二つあります。

二、だれもが当事者に

その一つは、〝いじめ〟は特別なことではなく、だれもが加害者にも被害者にも傍観者にもなる可能性があるということです。

「〝いじめ〟はありますか」という問いに「ない」と明確に答えたのは三人に一人にすぎません。逆に「かかわったことがありますか」という問いは、「いじめられた（被害）」、「いじめた（加害）」、「見て見ぬふりをした（傍観）」のいずれかに二人に一人がかかわっています。さらに、「今後は減る」と思っているのは、五人に一人しかいません。

これらの数値は、〝いじめ〟はどこにでもあり、だれもが被害者にも加害者にも傍観者にもなりうるという事実を、子どもたちは私たち大人に対して突きつけていると考えます。もしそうであるなら、「いじめを根絶する」といわれますが、たぶんそれは不可能でしょう。さらに、誤解を恐れずに言えば、もし処置を誤れば、むしろそのこと自体がより強固な子どもの管理を生み、新たな〝いじめ〟現象を誘発する可能性さえあると考えます。だれもが当事者になりうる人間関係のあり方とすれば、そのコントロールの仕方こそ、子どもが一人の人間として自立するためのハードルの一つであると考えるべきではないでしょうか。

すなわち、人間の自立にかかわる問題であるならば、さらにそれが子どもたちのみの世界で生じる現象であるとすれば、〝いじめ〟の克服は、大人が子どもを監視し処罰することで〝いじめ〟を消滅させる、という方向ではなく（原理的に不可能）、たとえ時間がかかっても、子どもたち自身が一人の人間として自立するために何が必要かを問い続ける過程において解決すべき課題と考えます。

そしてこれが子どもたちの回答から私が読み取った二つ目の視点です。

三、子ども自身の問題

〝いじめ〟に関する報道や論議の多くは、その原因と解決の方法を、学校と教師あるいは親や家庭のあり方に求める場合が多いはずです。このような試みを否定するわけではありません。しかし、このような〝いじめ〟のとらえ方は、たとえ善意を前提にしているとはいえ、子どもを保護すべき対象としか見ていないことにならないでしょうか。

「〝いじめ〟の原因はだれ」との問いに対して、四割以上が「両方」と答え、「いじめる側」が三割、「見ている側」と「いじめられる側」がそれぞれ約一割です。

この調査結果は、〝いじめ〟の当事者（加害、被害、傍観のいずれも含めて）とは、教師でも親でもなく、子どもたち自身であること。それゆえに、〝いじめ〟を解決する方法は、当事者である子どもたち自身が見いださない限り、根本的な解決にはならない、ということを示唆していると考えます。

もちろん、これは大人の側に責任がないというのでも、〝いじめ〟の問題は子どもに任せればよい、ということでもありません。まして、〝いじめ〟の側にまわる子は、かって〝いじめられた子〟である場合が多々あり、大人とりわけ子どもの教育や指導にかかわる者の心ない言動や対処の仕方が〝いじめる原因〟になることを忘れてはなりません。

さらには、何よりも、〝いじめられた子ども〟に対して、あなたにも原因があるのよ、と加害と被害を混同するような指導は論外です。「いじめの原因」に四割以上が「両方」と答えている子どもの現実に対する責任は、大人すべてが引き受けなければならない課題であることは言うまでもありません。

四、現代の人間の証明

以上のことをふまえた上ではありますが、大人がなすべき最も重要なこととして、私は次のように考えます。それは、子どもたち自身が、〝いじめ〟をコントロールするために何をすればよいかを、〝互いに悩み考え行動する機会と場〟をいかに用意するか、ということです。

ただし、これは「いじめはお前たちの問題だから自分で考えろ」ということではありません。私たち大人自身が、自分たちの世界にある〝いじめ現象〟を克服することで、子どもたちに〝いじめ〟をコントロールする方法のモデルを提示できるかどうか。これが〝機会と場〟を用意するための第一歩であることを強調しておきます。

最後に、〝いじめ〟が人間の世界に普遍的に存在する現象であるなら、その克服（コントロール）こそ、年齢にかかわりなく、現代社会に生きる「自立した人間の証明」であること。このことを〝いじめられる側〟にまわった子どもたちが、自らの痛みと悲しさによって、私たちに教えてくれていることを、自戒を込めて指摘しておきたいと思います。

〔〝いじめ〟の背後にある現代社会における子どもの育ちの問題点については、拙著『なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか』（明治図書）を参照ください。〕

社団法人　全国公民館連合会

NO.458　月刊公民館
THE KŌMINKAN MONTHLY

目次

平成七年（一九九五年）七月

とびら　現場に学べ　宮脇　昭　4

特集　女性の社会参加支援

論考　男女共同参画の時代と公民館　原　ひろ子　5

実践事例①「女性の社会参加・参画支援」
——足立区女性総合センターの取り組み——　足立区女性総合センター　11

実践事例②　身近な環境問題に取り組んで
——「南橋リサイクルの会」に学ぶ——　前橋市南橋公民館　17

参考文献　22

参考データ　23
1. 女性の社会参加
2. 社会参加活動の現状
3. 男女別にみた社会的活動の種類別行動者率
4. 女性の自立について
5. 婦人教育施設

奮戦記　公民館事業に思いを込めて　桶田　潔　26

タブーに挑戦　小林秀夫　27

読上セミナー　公民館Q&A　公民館整備・運営研究会　28

公民館における文化活動の振興　栃木市中央公民館　32

わがまちの公民館　名張市桔梗が丘公民館　36

公運審サロン　公民館活動を活性化するために　森　カツ子　39

ロビー　学習ボランティア　萩野武文　40

体験交流　伸びよたけの子、頑張れ親竹　山岸淳子　41

時の話題　〝いじめ〟のコントロールは、現代の「人間の証明」　馬居政幸　42

TOPIC

町から村から　44

行政だより　平成七年度国立大学公開講座の開設予定について　46

ファイル　視聴覚情報・資料／閲覧室／受贈資料リスト　49

編集後記　52